

令和3年度（第1回）佐賀県立名護屋城博物館協議会議事要旨

日 時：令和3年7月29日（木）14：00～15：30

場 所：佐賀県立名護屋城博物館 図書閲覧室

出席者：委員7名（宮島副委員長、中野委員、福岡委員、矢筒委員、石橋委員、藤委員、石山委員）

事務局6名（家田館長、松尾統括副館長、武谷学芸課長、山口総務課係長、安永企画普及担当係長、宮崎調査研究・史跡活用担当係長）

県文化課2名（久保参事、久野主任主査）

会議の冒頭、館長・副委員長のあいさつのあと、新任委任（石山委員）の紹介を行い議事に入った。

議 事

（1）令和3年度の事業実施状況

統括副館長がパワーポイントを使って説明

（2）「はじまりの名護屋城。」プロジェクトについて

文化課主任主査がパワーポイントを使って説明

（3）前回協議会における意見概要と対応状況

総務課係長が資料に基づき説明

（4）質疑応答

（委員）

昨年も説明いただいた中で非常に興味深く思ったのは、このはじまりの名護屋、おわりじゃないはじまりの名護屋は。今回も興味深く聞かせいただきました。

一つ感想とそれから別の質問があるんですが、今回の黄金の茶室、非常に私もいいなと思っております。ウェブの記事では、歴史を身近に据えた野心的な試みと、他の委員が言われていますので、私もそのとおりだなと思っております。

ぜひともこの黄金の茶室、確か8年ぐらい前ですかね、一度こちらに来た時に、妻と一緒に見せていただきました。

この中でお茶を立てて飲んだらいいだろうなと思っておりますので、ぜひとも頑張ってお茶を立てていただければと思っております。ぜひともこれを、いろんなところで発信をしていただければと思います。

もう一つ質問ですが、サイクルルートによる自転車で観光地をめぐるというのは最近増えております。その中で、単に自転車でここに来てくださいというだけではなくて、最近多

いのが、バスに自転車を乗せられますかとか、J Rで乗せてきてその後またバス乗せられますかという質問があります。

全国のバス事業者の中に、これはバスの構造上トランクが大きいところに入れる部分、それから自転車を使用するラックこれを取り付けるとか、いろいろあるんですけども、その辺、県ではそういった公共交通機関を通じたサイクリングの発展とかそういったものにとどいうふうなお考えを持ちなのか答えていただければと思います。

(文化課)

まず黄金の茶室、お越しいただいたということでありありがとうございます。展示をこの場所ですべて見ただけだったかと思えます。

金の茶室も派手なのか、いや、実は入ってみると意外と居心地がいいのかいろんな意見が実はあるもので、正解は実はわからないというところでございます。そういったところも含めて、体験していただく場面としては、歴史の知識がたくさんない方でも感じ取ってもらえるような装置として非常に面白いのではないのかなと思っております。

今年度末の完成予定ですので、是非、その時には楽しみにしていただければと思います。

あとサイクルルートに関してですが、検討の中で、実はおっしゃられていたとおり自転車を運ぶ手段がもう少し要るのではないかというのが課題として出ております。聞き及んだところによりますと自転車を列車の中に入れてたり、若しくはバスに乗せたりする時は包んでしまわないといけなかったり、若しくは、タクシーとかだと後にキャリアを積んでないと自転車を乗せられないと、そういったハード面といいますかソフトとはちょっと違う部分での課題があると聞き及んでおります。

今回、名護屋城のプロジェクトでは、そこまでは整理を進めきれなかったのですが、現在、県の観光課でもこの名護屋城という小さなエリアではなく、もっと広いエリアでのサイクルツーリズムの活性化というものに取り組んでいますので、そういったところと連携が出来るといいなと思っており、情報を共有しながら進めているところです。

お知恵をお借りしながら進めたいと思っているところです。

(委員)

特に黄金の茶室は SNS 映えすると思えますので、きっと多くの方が来られるのではないかなと思えます。

(副委員長)

自転車については運ぶのではなく、館に置くということは考えられたでしょうか。

(文化課)

自転車をレンタルで置くということも検討したのですが、やはり維持のコストがどのぐ

らいかかっていくのかというのは、まだ見えなかったものですから、現状では 1 回見送っております。ただ、これも、昨今、土日などに、このエリアまで自転車で来られている方も多いので、まずは今来られている方に、陣跡の情報を知っていただくというような使い方をまずは考えております。

やはりアップダウンが結構あって、経験者の方には割と大丈夫でも、初心者の方には電動が向いているのではないかなという意見もあったりしております。

その辺りを、県の観光課、観光協会が進めている事業でも、レンタサイクルの設置に補助を出すような取組をしまして、やはり直営でやるというのはなかなか維持管理も含めて課題が多いというところもありまして現状補助を進めているところで、必要に応じて検討していきたいというふうに考えているところです。

(委員)

質問ですが、今こういうことやっていますよという話が今日あったんですが、全体ですね。それで、今の名護屋城博物館が抱えている課題というか、そういったものについての説明というのは特になかったんですが、ということは、今博物館はもうこのままでいいんだという御理解なのでしょうか。ちょっと意地の悪い聞き方になりますけれども。

例えば、僕は、入館者なんてどうでもいいと大体こういう博物館協議会で言っているんですが、これ減っているってことは、やはり減っているなりに、何らかの抜本的な改革をすべきであって、その一環として、今、黄金の茶室の話がありましたけれども、そういうプロジェクトも進んでいるんだと思いますが、それで十分かということ、それはどうなんだろうということになってくると思うんですね。それで、ついこの間はちょっと呼ばれて、岐阜県の関ヶ原に講演で呼ばれて行ってきたんですが、ちょっと似ているんですね、関ヶ原とここ。要するに時代的にも近接していますし、あそこは 1 日だけ合戦があったんですが、そこにほとんどの全国の大名が集まって、天下分け目の戦いをやったと。1 点突破なんですね。ここも同じ。1 日じゃないけれど。ただ、今どうかということかなり寂れている。それで交通の便も悪い。それまで関ヶ原町立の歴史民俗資料館みたいな施設があって、小規模な展示はあったんですが、どちらかということ、実際の陣跡がそこにたくさんあるので、あそこが徳川家康、ここは石田三成とかいうところを見せるのがメインだったんですね。それじゃやはりなかなか大変だということで、岐阜県が、去年の 10 月に関ヶ原古戦場記念館を作ったんですよ。それで行ってみるとびっくりするんですが、もうとてもいわゆる従来の「博物館」じゃないですね。エンターテインメント重視で。入ってくると、何分か単位で、取りあえず、関ヶ原古戦場のジオラマみたいなものがあり、そこで事前学習をするんですよ。事前学習をして、大体合戦の流れは皆知っているんでそれを見て、実際の展示場に行くみたいな感じで、最初のジオラマ、そこのバーチャルな合戦の学習コーナーがいいかどうかというのは、人によっていろいろあるとは思いますが、やっぱり何かそういう、ここだったら、朝鮮出兵って何なんですかっていうのをきちっとまず事前学習というか共通認識みたいな場を作って、

それから個別の展示に入っていくとかいうことも考えてもいいんじゃないかなと思いました。それで人数が増えるとは思いませんが、今は、来館者のレベルにある程度委ねている展示だと思うんですね。ある程度のところまで階段を押し上げてあげないと、展示しているものの意味というのが、果たして現状で伝わるのかどうなのか。分かる人に分かるんでしょうが、そこら辺に、何か工夫がこれからあったほうがいいのかと思いました。

それと、県内の博物館の利用促進についてですが、一つはやっぱり鍋島や唐津の寺沢はすごく大きな仕事するんですよね、朝鮮出兵の時には。だから、折角の県立の施設なんだから、小中学校にお話に行くにしても、地元の名にもう少しフィーチャーする。朝鮮出兵は、小中学校の教材としてどうかとはなるんだけど、やはり、地元フィーチャーしていくっていう考え方もそろそろあっていいのかなあと思ったりしています。

それともう一つは、佐賀県に引き付けて、つらつら考えると、朝鮮出兵で江戸時代とか近世が始まって戊辰戦争で終わる、と仮にすると、ここは唐津ですけど、やっぱり佐賀藩の力というのはすごいものがある。そういう佐賀県を舞台にした歴史のストーリー性ってまだ結構、未開拓じゃないかと思うので、はじまりの名護屋だったら、終わりの佐賀があってもいいのかもしれないとちょっと思ったりする。そういう県の何かに軸足を置いたような展示をそろそろ考えてもいいのかなあと。日韓交流にずっとウェイトがあり過ぎたような感じがあって、ちょっと外交問題もこんな感じなので、もうちょっとこう佐賀県というか足元を大事にするようなことも考えてもいいのかなあとちょっと思いました。

ですけども、やっぱりこの博物館は、始まりは史跡保存なので、考古ベースのお話が多いと思うんですよね。もう少し文献の資料の話もあっていいんじゃないかと思う。何を考えているかという、今日は何の日みたいなものがあるじゃないですか。秀吉がここに入ってきて、次の年の8月ぐらいまで、中抜けはしますけれどもずっと居るんですよね。そうすると1日単位で、恐らく今日は何の日ができるんですよ、名護屋を舞台にして。そうすると子供たちが入っていた時に、ぱっと見た時、今日は何の日だというのがあると、もしかすると、もうちょっと歴史を身近に感じてくれるのがある。太陽暦と太陰暦の調整といった問題もいろいろあるんですが、もう少し文献の資料も活用してもらって、今日は名護屋では何があったんだみたいなことは、結構可能じゃないかなと思いました。

(事務局)

先程の関ヶ原のガイダンスの話についてですが、当館で言えば、従来、ビデオコーナーとシアターがあって、開館以来、ガイダンスは、御存じのとおり文禄・慶長の役のストーリーから、名護屋城跡及び陣屋等のストーリーで一応流しています。

韓国の状況を見ると例えば国立晋州博物館などもそうなんですが、もっと、今、例えば、関ヶ原の例でおっしゃったように、ドラマチックなアニメーションだったんですが、子供たちが喜ぶような或いは大人たちが喜ぶような仕掛けをやっていたことを思い出したんですが、何とか当館についてもリニューアルしたいなと思ったこともありました。

当館は、ガイドンス施設ともう一つは、学芸員による説明で、理解を深めていただいています。今おっしゃったように、できれば、そういうガイドンス施設には、最新のものを取り込めなければいけないのかなと、御意見を聞いて思ったところでございました。

(事務局)

鍋島家は、佐賀のほうで結構取上げられている部分もあり、直正氏が先行していますけれども、直茂氏は、実はよく調べると、鍋島家の始まり、佐賀藩の始まりところで、非常に重要な位置を占めていると感じております。

是非、直正氏の次は、直茂氏をあくまでも歴史的な事実に基づいてきちんと検証して、もっと広めて行っていただきたいなと思います。

直茂氏だけではなく、この唐津でいうと、寺沢氏は、非常に大きな仕事をしている。今見る唐津を作ったのは、実際は寺沢氏である。

寺沢氏は、隠れていますが、墓も立派で、最近でこそマイナーなイメージになっているんですけども、地元のほうでも信仰の対象みたいな形で扱われた時期が近年まであったみたいですので、その辺りをしっかりと取上げていきたいと思います。

名護屋城博物館、賛否両論あるんですが、テーマパークみたいな感じになるっていうよりも、私的にはやっぱり入った時のインパクトが大分足りないのかなと、インパクトをもっと、また今後リニューアルする機会とかそういったところを踏まえて目指してやっていかなければいけないのかなと思います。

やはり有名な博物館とか水族館なども含めたそういった施設やテーマパークでは、やはり導入部分のインパクトっていうのが非常に大きな部分を占めると思いますので、その部分でしっかりと心をつかまえるような、博物館であつたらいいのかなという気がします。

ただ今は、整理がついてないので、どういう感じにしたらいってところについては今後いろいろと検討をして、いろいろお話をお伺いしていきたいと思っています。

(事務局)

それともう一つ課題ということで、もう間もなく当館は30周年を迎えますが、委員の皆様には是非アドバイスいただければと思いますけれど、当館には、国の重要文化財はまだ館藏品ではないんですね。県指定のものも少ない。ところが、私がかねがね、いろいろな分野で、結構いい資料を持っているのではないかと考えています。

なので、国の重要文化財を一つでも二つでも、持てるようになって、もうちょっと博物館としての格を上げていくようなこともできればなというふうに考えています。

(副委員長)

屏風は文化財では？

(事務局)

今のところ、県の重要文化財です。

おそらく国指定の候補としては、1番近いのかなと思っています。いろいろな意味で、歴史資料としてもおそらく一級品だと思いますので、今後、高められればなというふうに思っております。

(副委員長)

今30年の話が出たんですが、厳しい言い方をすれば、30年間、歴史博物館、歴史観が変わっていないんじゃないか。今、指摘あったように、これまでの研究成果をもって、文禄・慶長の役等々把握し直す必要がある。

もう30年経っていますから。それはあるんじゃないかと、こういうふうに思っています。

(委員)

昨年度、生徒たちと一緒に出前授業を学校で聞いた時に、こういう意味があるんだということを、私自身も初めて勉強させていただきました。

地元の子供たちは結構知っている内容だったんですが、私は本当に初めて聞きましたので、こういうことで、博物館があるんだということも理解ができました。

ですので、出前事業などで裾野を広げていくっていうのは、一ついいのではないかなというふうに思いました。

そのほかにも、先ほど説明していただいた内容が、昨年度こういうことをやっていきますと言ってくださっていたことが、いろいろ取り組まれていたので、実際ここで話されたことが実現していくんだなっていうことは、今、聞いておりました実感しました。

あともう一つ、日頃、車で通勤しているんですが、ラジオで聞いていると、歴史講座の案内が、ラジオで案内されていまして、実際、素人の私も参加してみたいなって思ったことがありました。コロナがひどかった時にあったので申込みは出来なかったんですが、ラジオを通して御案内していただくと大変身近に私は感じたので、そういう人もいるんじゃないかなあというふうに思いました。

あと最後に「はじまりの名護屋城。」の周遊ルートをつくられる時に、観光資源を巻き込んだものをつくるっていうことだったので、私たちの立場からいうと例えば、この辺にはすばらしい自然があって、魚釣りスポットだったりとか、いろんなものがあるので、そういうところとか、余り興味がない人にとってはおいしい食べ物とか、きれいなトイレとか、そんなようなところがちゃんと記入してあると、とても魅力的に感じます。

そういうところをちょっと取り入れていただきたいなと思っています。

(文化課)

名護屋城のことを知っていただく手段としてラジオなどの活用もということで御意見い

ただき、ありがとうございました。

ラジオですとおそらく車で利用される方には1番いいのではないかと思っています。

先ほど説明したキャンプやサイクルのイベントの時には、テレビ局に取材に入ってもらったりはしましたが、ラジオなども積極的に検討していきたいと思っております。

(委員)

今年度から海青中学校で5回、学芸員さんによる名護屋城の講義していただいているということで、私自身、海青中学校生の保護者でもあります。

子供たちが家に遊びに来て、会話していたのが、眠たかったよねと。すみませんが率直に。やはり、こういう歴史的にすごい場所に住んでいながら、歴史に触れる機会が少なくて、私も教育委員を引き受けるとともに、11年間務めた仕事を辞めまして、まずしたいと思ったことが、陣跡巡りだったんですね。それをすごく子供に伝えました。佐賀県を出て、他の地域で仕事した時に、やはり誇りに思っていたと聞いています。ですので、すみませんが、もう少し子供たちが眠たくならないように。

やはり先ほど言われたように、子供たちは、こういうすごいところにいるということをおかかってないんですね。

(副委員長)

認知度、満足度を強く言われていますのでよろしく申し上げます。

(委員)

私は、8歳ぐらいからずっと鷹を触ってきていますが、これからワンランク進んでいくためには、今の鷹匠のスタイルではなくて、日本の最高レベルの時代と考えた時に、戦国時代それから江戸時代初期の鷹匠の姿っていうのを学ぶ必要があると思っています。

全国の大名たちが集まって、長い時間いて、なおかつ、いろんな文化の交流っていうのもあって、藩同士、鷹の流派も違っていたり、藩独自の鷹の文化っていうのも存在しているんですね。鷹の文化に関しては、それまでは、天皇家からの流れでずっときていたんですが、文禄・慶長の役を経て、朝鮮半島の鷹匠を連れてきて、それがまた日本流でやっているっていうことで、さらに日本の鷹文化が発展しているんですね。それから言っても、名護屋城というのは、非常に濃い歴史のある場所です。

私は、鷹の文化の関係で、県外や海外に行くことがありますが、海外の鷹匠達は、自分たちより長い日本の歴史を知りたいがっているんですね。珍しいところ、深いところを知るきっかけがないので、逆にそれを求めている人たちもいるのかなと感じることは結構あるんですね。

鷹以外の、もしかしたらお茶や焼き物もそうなのかもしれないんですけど、大体のことはわかっているんですけども、その深い世界っていうのはわからない可能性が高いので、今

やっている方と、それから文書とかを読み解いたりとかされている方、そういった人たちとうまく連携するということが大事になってくるのかなと思います。

名護屋城も違う観点の方から見れば、これはこういうふうなものですごいいきたいな、その人が評価するから何かもっとすごくなるみたいなの、そういうことが出てくるのかなあとか思いながら、お話を聞いていました。

(副委員長)

名護屋城はやはり全国区で、秀吉のいた時代の一大ターニングポイントで、さらには、世界史上も、当然、朝鮮出兵という問題がありますけれど、もう一度把握し直す時期に来ているんじゃないかというふうに私は今聞いていました。

(委員)

皆さんの今の御意見をずっと聞かせていただいて、まず、2点ほど私の意見ですけれども、昨年の鬼島津の展覧会も、すごく面白かったですし、それから、今、やっているテーマ展の「玄界灘でクジラがとれた日」というテーマ展もすごく個人的には面白いなと思って、見学させていただきました。9月の「綺羅、星の如く」という企画展も、すごく楽しみにしております。それと、「はじまりの名護屋城。」プロジェクトで、10月の大茶会、それから来年黄金の茶室も展示をされるということで、すごく楽しみで、もっと、いろんな人に知っていただきたいなあとというふうに思っていますね、今日のこの会議で話し合われたこととか、意見を、私は裏千家の唐津支部の方から来ておりますので、支部のほうに持ち帰りまして、幹事長以下支部のほうで、お知らせをしたいと思うんですけれども、例えば、それで、お茶に関してですね、いろんなことで、もしできることがあるならば、いろんな形で協力をさせていただきたいというふうに思っていて、そういうことに協力できるということはとても幸せなことだなと思っているので、もし私たちがよければ、いろんなところで協力したいというふうに思っているんですが、例えば、これを支部のほうに持ち帰って、こんなのがありますので、名護屋の方に来てくださってというふうに話した時に、第一声がですね、皆さんがそうではないと思うんですけれど、「でも名護屋は遠いしね」って言われるんです。

ここが出来た時、25、6年前ですか、それで、そのあと、私が勤めている茶苑海月という施設も26年になりますし、その時から、名護屋で何かがありますので、お茶で協力してくださいとか、唐津から来てくださってかかっていうと、大概皆さん、唐津だとよかったのにねとか、名護屋遠いからねって、ずっと変わっていないんです。

何かこう、他所事なんですね。20年経っても距離が縮まってないというふうに私はすごく感じていて、なので、同じ地元ですって、地元意識みたいなの、みんなで一緒に行こう、地元から、盛り上がっていくってことを、もう少し考えた方がいいのかなあってというのを考えていて、それが佐賀のストーリー性であったり、入館者が減っているということの抜本的な対策とか、それから、出前講座で裾野を広げるってということも、何かみんな結びついて

いて、そういうことにつながるのかなあというふうに自分の中で考えていたんですが。

もう一つは、「玄界灘でクジラがとれた日」というテーマ展をすごく楽しく見て、地元の70代の方とお話をする機会があって、その方は、実際に自分が小さい時に、名護屋浦で捕鯨の様子をごらんになっているんですね、その時がこうだった、ああだったというのを、もう本当に、昨日の話のようにわーっと話されるんですが、私は、捕鯨の終わった時期に生まれているので、もう捕鯨を、この地域で捕鯨があっていたってということを知っている人がだんだん少なくなっていて、その話を聞いていた時に、実際、今の小学生とか中学生が、ここで捕鯨があっていましたっていうのをどれだけ認知しているのかなって思った時に、これはどうにかして、何か伝えていく術がないのかなあというふうに、1人で思ったところでした。

やっぱり何をやるにしても、地元の協力とか、地元の人の上りというものは、馬鹿にならない力じゃないかなというふうに思いましたので、そこら辺を、佐賀県とか唐津市とかですね、地域の人で考えていく時期に来ているのではないかなというふうに思いながら皆さんの意見を聞いておりました。

(副委員長)

地元との距離っていうのは重要な問題なので、事務局の方から回答ください。

(文化課)

「はじまりの名護屋城。」関係で、地元の皆さんと意見交換会というものをやっています。

黄金の茶室、大茶会、陣跡めぐり、大体その三つについて、県の事業で取り組んでいるのでお話をしますが、皆さん、陣跡巡りに非常に興味がなくて、陣跡の整備をしたいとか、太閤道に手を入れたいとかいろんな御意見をいただいている。

地元非常に愛の深い方々が、参加していただいているので、非常に、御希望がたくさんあられると思っていたところです。

そこにどこまで答えられるか、ただ私たちも一緒にやっていきたいと思っていて、その会議には唐津市も同席をしています。

ただ少し思っているのが、やはり唐津も広くて、私たちは佐賀県なので県域全体で考えて特にこの「はじまりの名護屋城。」は、県が展開している唐津プロジェクトの一環としての一つとして文化ツーリズムの振興としてやっておりますので、そういう意味では唐津の振興という位置付けでやっているんですけども、唐津の中でも街中とこの辺の地元というところで少しその意識がですね、うちの中の人、他所の人みたいな意識があるので、そこをもう少しこう馴染めるようなことが出来たらいいのではないかなと思っています。

ただそれは今後一緒に、皆で取り組んでいくことで、少しずつ一歩ずつ、ときにはけんかしたり、仲良くなったりしながらなのかなと思っていますけれども、そういうことで地元と一緒にやっていけたらいいなと思っています。

(事務局)

今、御意見としていただきました、地域に根ざした博物館というのはすごく大事な視点だと私も思っております。これは何も、当博物館だけの問題ではなくて、日本のミュージアム全体が抱える非常に大きな問題で、例えば日博協とかそういった中でも非常に盛んに議論がされているところだというふうに感じております。

当博物館も県立博物館ですので、佐賀県としてという部分がありますが、特に県の北部地域にある唯一の県立の博物館という意味で、地元のこの唐津東松浦の歴史や文化というのを紹介するというような観点も一つ持ちながら活動しております。

そういった意味合いで今回のテーマ展ですね、捕鯨に関するテーマ展も開催をさせていただいているところです。

博物館がこの社会の中でどういうふうな意義を果たしていくべきかという中で、その地域に根差すという部分、その地域社会の中で、必要であるためにというようなところは非常に大きな視点で盛んに議論もされていますし私もそこは非常にしっかり認識をしながらですね、今後の事業展開にも反映をしていきたいと、そういう観点を活動続けていきたいというふうに思っております。

(副委員長)

今、「はじまりの名護屋城。」というキャッチフレーズをつけていただいたんですが、博物館は変わるってことを前々から私はやらせてもらっているわけですがけれども、やはり、今日話を聞いていくと、柔らかくして、認知度を高めないとまずいんじゃないかと思うんですね。先ほど言われたように、黄金の茶室を期待される、これやっぱり一つのキャッチフレーズだと思うんですね。去年は、鬼島津と言っていましたから、そういう、キャッチフレーズを沢山作る、或いは、博物館の日、何とかの日というように、先ほど言われたように、これまで、博物館はちょっと古かったんだと思うんですね、30年経つと変わらないと、さっき言いましたように歴史観が変わると同時に、そういう立ち位置も変えていかないと成り立っていかないんじゃないか。

それはコロナ禍で、今年たくさんの企画、新たな企画されているんですが、コロナがもっと感染者が増えたら、一体企画はどうなるんだ、博物館はどうなるんだっていう問題も、さらには出てくると思うので、その辺も心配しながら私は聞いていました。

そういう意味では、博物館はありますから、いろいろ企画されている場合、ぜひとも博物館と陣屋跡と結びつけた企画、それからこれまで研究されてきた成果をもう一度洗い直していただきたいというふうに思っています。

(事務局)

先ほどの大きな課題というところにも関係してくるんですけども、皆さんの御意見を

拝聴する中で、やはり当館の情報発信力というのが、まだまだ十分ではないのかなあというふう感じていました。これだけの歴史的な意義のある、史跡の情報発信ツールというのはいくらでもあると思うんですが、そこを当館が、十分に発揮出来てないというところを感じております。

そういう中で、一つのコンテンツとして、今度、黄金の茶室も出来ますし、様々な広報媒体を使って横展開をしていきたいというふうに考えております。

来館者の話もありましたけれども、肌感覚として感じているのは、当館に来館する方のユーザー層としまして、かなり歴史的な観点で好きな方っていうのがいらっしゃいます。もう少しライトユーザーといいますか、歴史的にちょっと関心があるけれども、何かのブームでちょっと寄ってみようかとかいう方もいらっしゃいます。

それからもう一つは例えば呼子の方に足を運んだついでに、ちょっと寄ってみようかというような軽い動機の方、大体この3層の方がいらっしゃるんじゃないかなというふうに思っています。

そういう中で、どの層がどのくらいの割合というのは、データ的には持ち合わせてないのですが、このライトユーザーから気軽に来られる方に、情報発信力をもってすれば、かなりの方が当館に足を運んで、それをきっかけとして、当館の魅力、ポテンシャルを知っていただく機会が受けることができるんじゃないかなというふうに感じております。

そういう状況の中で、先ほど副委員長からありましたポストコロナを見据えて、どういうふうにして対応していくかというところを検討していきたいと思っております。それから発掘整備関係の中で、非常に大きな課題としまして、説明の中で触れましたけれども、財源的問題もありまして、なかなか発掘調査自体が進まないというところがあります。

そういう中で「はじまりの名護屋城。」で陣跡を巡ることを進めていくわけですが、そういう発掘調査を整備するところが広がっていかないと、この「はじまりの名護屋城。」も広がりがなくなってくるのではないかと懸念しております。

県と博物館で、よく課題を整理しながら進めていく必要があるのではないかなというふうに考えております。

(委員)

正しいと思うんですよ。行政がやっている仕事なんでどうしても佐賀県とか唐津市になっちゃうんですけど、やはり福岡都市圏の人たちをどう取り込むかっていう戦略がやっぱりかなり大きいと思うんですよね。今回この黄金の茶室もそうなんです、あれは実は博多の茶人の神屋宗湛という人の日記に出てくるんで、朝鮮出兵している時もそうなんです、博多が名護屋を支えるんですよね。経済的にというか、要するに、ぽっと出の町ですから、すぐ造ってしまうので、技術とか資本とかそういった蓄積は博多に委ねざるを得ないので、博多がバックグラウンドとして初めて名護屋が成立する。だから歴史的に見てもやはり博多というか福岡都市圏をどう取り込んでいくかっていうのが戦略としてはとても大事

で、福岡の人も今東京大阪に行けないから、どっか近場で探しているんですね行きたいところを。糸島までは来ているんですよ。すごい人気があるから。福岡都市圏にどう発信していくかってそこでぱりピーターをつくっていくっていうのは、少しお金かかるかもしれないけれども、サテライトなどで何か、博多駅前ですら時々マーケットをやったり、それとか、東北とか沖縄とか対馬とかのサテライトショップもありますが、佐賀のサテライトショップもあると思うので、そういったところではどんどん攻めていかないかないと。福岡から人を呼んでいけば、福岡を起点にしてつながっていくと思うんですよ。名護屋からいきなり全国というのは、ちょっとハードルがあると思うので、やはり佐賀市と福岡市を二大サテライトみたいな形で発信していく、何かそういう戦略が要るんじゃないかと、今聞いて思いました。バスの力が大きいですよ。

(委員)

観光事業に携わっているんですが、実は、以前、糸島市長と話しをしたことがありまして、市長は、唐津市と仲良しなんですけれども、ただ福岡県のお客さんは、糸島で止めてしまう。唐津までは行かせないと言われたので、いやそれは違うと、やはり我々交通業者としても、糸島と唐津と福岡が一緒になって発展していきましようという話をしたことがございます。

ぜひとも、それは唐津市の話なのかもしれませんが、唐津と糸島が一緒になって地域を発展させている玄界灘ウエストコースですね。ぜひとも福岡県のお客さんを、当社も努力したいと思いますので、名護屋まで来ていただきたい、そういったことを考えたいと思います。今、マイクロツーリズム、近場で旅行を楽しみたいという方々が増えてくる。おそらくシニアの方々は、ワクチンを2回打ってお金も時間もある。何をやりたいかという、食事に行きたい、旅行機会。旅行も日帰り、一泊二日程度の地域でと。そうなってくるとマイクロツーリズムで、近場で名護屋に黄金の茶室があるぞ。ちょっとミーハーだけれどもあそこに行ってお茶を飲みたいねとかそういった売り方ができれば、結構福岡都市圏から来られるんじゃないかなと私は思っております。

今までの旅行の在り方が大きく変わってくる、コロナで変わってくる。ある意味チャンスかもしれないと思います。